

対テロ戦争とアジアの市民社会

——暴力の連鎖を解くのは誰か?——

対テロ戦争の時代について、どのように考えることができるでしょう。普通の市民として、いったい何が考えられるでしょう。一〇年ほど前マドリッドに行ったとき、戦争によって殺された死体や犬を描いたゴヤの絵やピカソのゲルニカの絵を見たことがあります。そのとき、原爆の絵を描いた丸木夫妻の絵も思い出しました。戦争のような流血の惨事。そして、テロ後のニューヨークの光景が「グランド・ゼロ」と呼ばれたことは、記憶に新しいと思います。このような「破壊の光景」が、二一世紀の対テロ戦争時代の幕を開けました。この、どうしようもなく残酷で巨大な破壊を、私たちはどのように受け止めればよいのか。これが、現代世界の市民に課された問いではないかと思っています。対テロ戦争に走り出す前に、どう受け止め理解すべきなのか、です。まさに、これらの「破壊の光景」は、言葉にならない、言葉以前の黙示録的な破壊の図、地獄絵のようなヴィジョンです。

ある意味で情報の速さがあって、いま言ったように、非常に大きな破壊を抱えざるを得ないグローバルな状況に、すべての人が何ら

竹中千春

かの形で巻き込まれている。逆に言うと、そういうものをヴィジョンとして見せられる人間が——私たち一人ひとりですが、平和の光景、安定の光景、幸せの光景というものを実感としてはとらえにくい。ニュースでは戦争や破壊など、悲惨な光景が強く報道されますから、普通の市民としては、世界がこのまま安定して二一世紀の終わりまで存在するだろう、自分たちの子供はきっと幸せに生きていけるだろう、その孫も生きていけるはずだ、という、本当に簡単なことですが、未来を信じて生きていくことが難しい時代になっているとも言えます。

にもかかわらず、私たちは、今現在、子どもや学生さんという、若い世代を育て教えていく立場にあります。そういう自分を考えたとき、いままで生きていて幾分か残酷な事件にも慣れているかもしれないのに、その自分ですらこんなにショックを受ける。それなら、若い学生さんはどうなのだろう。あるいは、もっと小さな子供たちはどうなのだろう。人類の未来とか、この研究所の名前の「倫理」、あるいは似たような響きのある「道徳」「良心」「助け合い」、

きょうの報告タイトルに入れた「市民社会」などを実感して育つことができるのだろうか。これは私自身の深刻な問題です。

今回『世界はなぜ仲良くできないの?』という本を書いたのですが、これは、殊に若い人に向けて、自分たちの世界は自分たちでつくっていける、つくっていかなければいけないというメッセージとして書きました。教える者の立場から、若い人を育てる立場から、市民自身がエンパワーしながら世界を平和なものにつくっていけるというメッセージを送りたかったのです。そうでないと、悲惨な話はどうほつといてくれという反応を広めてしまいます。ですから、そうした拒絶反応を越えて、市民が平和のヴィジョンをしっかりと持つて生きていくためのメッセージを、教師や親が伝えなければいけない時代になっているのではないかと思います。

そういうことを言うときとちよつと変わった先生だと思われたり、学会に行つて専門の国際政治などを話すときにこんなことを言うときとシカトされたり、報告させてもらえないかもしれないのですが、やはり自分たちがいま議論している、例えば国連の問題や平和構築、あるいは人道的介入などというものを突き詰めていつて何を考えるか。いつもはほかの人たちに言わないような問題ですが、若い人たちにはやはりそこから語っていかないといけないのではないかと思います。憲法九条を変えよう、日本の軍隊をさらに強くしよう、戦争は正しかったと主張しよう、といった学生さんもあります。ある意味では、そういう人たちと正面から議論をするためにも、少なくとも私の中にある平和への思いを、やはり学問的な言葉で提示

しなければいけないのではないかと思つた次第です。

そうは言つてもウェットになりすぎないように、以下の本論では、国際政治学会でも報告させてもらえそうな、現代暴力についての分析をお話していきたいと思います。

二 安全で豊かな世界、危険で貧しい世界

プロとして、市民の方、あるいは若い方々に、どのようにしたらわかりやすくとらえながらこの世界を説明できるかというところで、非常に難雑ですが、シンブルな議論をしてみました。つまり、「国際政治は複雑だから私たちにわかるはずがない。だから無関心でも仕方がない」あるいは「私の意見は大事ではないと思う。だから何も言わない」というのではなくて、やはりどこから取っかかりをつけてこの世界をとらえていこうよ、ということです。これが、私の問題提起です。

ある意味では簡単な話ですが、世界は現在グローバルゼーションで一体化している、あるいは市場経済で一体化していると言われます。その一体化するスピードが速いからこそ、逆にギャップというか、濃淡や広がりなどいろいろな違いが現れています。つまり、多様な格差が世界中に培われているのです。これを本日のレジュメの図1にしてみました。

つまり、先進国と途上国がある、南北問題があるという問題にとどまらず、先進国アメリカの中にも安全で豊かな世界と危険で貧し

い世界がある。日本の中にもこの二つの世界がある。あるいは、同じ南山大学の周りの住宅地にもある。そういう発想です。ですから、平均的に貧しい途上国、たとえばインドでは、日本よりも危険で貧しい世界にシェアが傾きますが、同じインドの中にも安全で豊かな世界はかなりある。とはいえ、危険で貧しい世界が広がっている。

つまり、どちらかと言うと、これは昔の社会学的な言葉で言えば「理念型」です。要するに、対抗軸というか、二つの異なった世界を対照して考えてみましょうということです。ですから、途上国やテロが発生するような紛争地域、あるいは危険な「ならず者国家」に問題がすべてあるという発想ではなくて、これは実はどこの国、どこの地域にも抱えている分断線であるということです。

左側の「安全で豊かな世界」は、私たちが常に日本において想定するような社会です。要するに、少なくとも普通は、安全性と豊かな生活が保障されている。台風や地震で壊されるようなことがあるとしても、普通は安全で豊かだと保障されていて、そこにはきちんとした自分たちの政府があって、政府は自分たちを守ってくれることになっていて、法と秩序がある。ですから、一応、市民が法によって自分たちの生活や安全を守ってもらえると前提にできる世界です。もつと言えば、人権や自由が保障される度合いが高いということです。完全に「安全で豊かな世界」は実在しませんが、そういう理念型として考える。普通、政治学的な議論するときには、どこかに理念型が存在しているだろうということを考えながら、「市民の社会」「市民の権利」「市民の義務」あるいは「市民の選択」という言

葉を使っています。

しかし、右側の「危険で貧しい世界」は、はつきりと deconstruct された、distort された、あるいは destruct されたと言いましょいか、要するに dangerous なのですが、危険で貧しい世界です。これは、政府があっても自分たちを守ってくれるどころか、むしろ自分たちを弾圧したり、殺したりするかもしれない。あるいはきちんとした政府がない。どこかの武装勢力が牛耳っている。あるいは内乱状況である。そういった地域です。これは別に国全体である必要はなく、辺境地域とか、あるいは紛争地域がこういう状況にあります。例えば、スーダンや二〇〇一年前のアフガニスタンがそうです。現在のアフガニスタンも、はつきり言えば、まだこうした状況が払拭されたわけではありませんが、戦後のイラクはこのような状況になってしまいました。インドなどではカシミールの内戦地域はこれに入りますし、あるいは盗賊がたくさん出るような島とかジャングル、砂漠地帯などはいくつかあります。

しかし、別に危険な国や辺境地域だけではなくて、アメリカとか日本の大都市にも、「危険で貧しい世界」があります。例えば、歌舞伎町とか渋谷のように、怖くて行けない、夜、行ったら危ないというようなところです。マフィアあるいは暴力団が仕切っていたり、多国籍のマフィア組織が仕切っていたり、警察も入って来られない。警察も、貧しいスラム地域であるために、住民を敵視しがちだ、といった地域は、先進国にももちろんあるわけです。つまり、同じ一つの国にありながら、そして同じ一つの都市にありながら、東京、

ニューヨーク、ロサンゼルス、フィリピンのマニラ、インドのデリー、イギリスのロンドンなどのように、夜、行ったら何があるかわからないよという地域と、ミドルクラスあるいはアッパーミドルクラスの本当に安全な住宅地域が、共存しています。

デリーやマニラでは、壁一つとか道路一つでスラムと高級マンション、高級ビジネスビルディングが併存している。すごく高いホテルの横にはスラムがある。高級マンションやビジネスビルやホテルは、警察が一生懸命守ってくれるので安全です。逆に言うと、泥棒や強盗もそんなに襲わないのです。ミドルクラスの人たちを襲うというのは大変なことなので、仮に暴動があってもそんなことはありません。しかし、スラムというのは常に警察に警戒され、犯罪者の巣窟だと見られて、不当な銃撃を受けたり逮捕されたりしがちです。それだけではなくて、暴動が起こったりすると、最初に殺されるのはスラムの人たちであることが多い。要するに、より命の値段が安いところ、そしてマフィア集団も根を張りやすいところなのです。

こういう貧しさや危険さを負った社会も含めて、私たちは民主化したので市民社会と呼びますが、現実には人権とか政治的自由、財産は守られにくい。ですから、勝手に造語をつけましたが、市民社会とは呼べないということで、とりあえず「非市民社会」という概念をあててみました。

左側の「安全で豊かな世界」には安全保障の壁がありますので、政府、軍隊、警察が守ってくれる、司法制度が守ってくれる、人権

が保障される。ですから、戸締まりされているという感覚がある社会です。右側の「危険で貧しい世界」は戸締まりがされていない。警察も軍隊も家の中にどんどん入ってくるかもしれない。マフィア、武装勢力が入ってくるかもしれない。そうじゃなくても、こそ泥もどんどん入ってこられるという世界です。震災後、新潟の人たちがどうしても家の前から動けないで車の中にいるのは、泥棒が入ってくるかもしれないからだそうです。安全保障の壁が壊れると、それがとてもよくわかります。普通の人たちはそれがあるところで生活しているのです。

世界はいま、安全で豊かな世界が経済的なりソース、政治的な力、軍事的な力を独占していて、「危険で貧しい世界」にはそれらが非常に少ない。対テロ戦争というのは、この二つの世界をはつきりと分断させる思想に基づいていると思います。つまり、あつちには危ないところ、行つてはいけないうところ。そんなところに行つたからには、死んでもしょうがない。小泉さんの話はこれです。行つてはいけなうと言っているのに行つたのだ。つまり、行つてはいけないうところをつくつてもいけないし、行つてはいけないうところに行つた人たちも助けなければいけないという発想ではなく、イラクの人質事件は、あつちへ行つてしまった人はいけませんよという発想です。私たちは、対テロ戦争の枠組みで世界を解釈してしまっているわけですが、その前提には、私たち、われわれ、Weというか、「安全で豊かな世界」と、彼ら、やつら、Theyというか、危険な人たち、あるいは「危険で貧しい世界」に住んでいる人たちというように、人類を選別し

て考えているのではないかと思っています。

三 暴力の構図

もう少しお話ししますと、安全と危険という軸で考えると、豊かな側はセキュリティー・システムにお金がかかりますから安全です。貧しい側は保障できるものが何もないので危険なのです。そして、これら二つの世界を隔てるものが、暴力の存在の仕方だと思います。これもかなり粗っぽいですが、「暴力の構図」として図に示してみました。

資料には載せていませんが、一方には、安全で豊かな世界が正当的、制度的に持っているものとしての暴力があります。つまり、軍隊、警察、治安部隊、あるいはそういうものが国際社会に供出された形のものとしての国連軍です。これらは、基本的には安全で豊かな世界の制度的なチャネルを通して合法的、正当なものとしてつくられますので、普通はそれをきちんとした暴力と考えています。

逆に、もう一方の暴力は、ポジとネガみたいですが、市民社会の制度とか国際社会の制度や法といったもののつとらないで、それと外れた形で形成されている暴力なので、だいたい悪い方に分類されます。かつてはこっちが正しい、革命勢力だという時代がありました。しかし、冷戦が終わって左翼革命勢力の評判は地に落ちました。革命的な武装抵抗という発想は、普通の人々の間でも非常に評判を落としていて、ほとんどインフォーマルな悪い暴力とみなされ

るようになっていきます。かつては、ジャングルでゲリラ戦をした毛沢東主義的な武装組織は、いまでも存在はしていますが、実体としてもイデオロギーとしても力を失っています。現実には、単純な武装勢力に近くなっているものがほとんどです。かつてはいい者もいたはずなのだけれども、いまは反政府武装勢力とか国際テロ組織と呼ばれている。あるいは先ほども言ったように、大したイデオロギーなどない、マフィア組織と言われるような暴力団も、私的な軍事力です。地主さんが持っている私兵団もあります。地主さんが持っているときには私兵団でも警察と仲が良かったりしますが、私的にインフォーマルで国家と対決する暴力集団が、数多く非市民社会にはびこっています。

一応、普通の私たちの発想からすると、暴力集団は制度的なものと非制度的でインフォーマルで怪しいものという二つに分かれると考えます。ですから、制度的な暴力集団がやるという事で、インフォーマルな暴力集団がやるという事で、どっちもが暴力を組織したグループ、しかも現代世界の紛争や内戦と言われるものは、これらのプロの暴力集団が企画し、実演するものであるというのが私の議論です。

それはどうしてかと言うと、テロ、武装勢力、内戦と言うと、市民戦争になって普通の人たちがすべて武器を取って、ジャングルや乾燥地帯から戦ってという発想をしがちですが、現実には紛争地域、あるいは暴動が起こった地域や内戦地域でも、AK47などのマシン

ガンを持っている武装勢力と、そんなものは全く持たない普通の私たちは全然違う存在で、あくまでも武装勢力が内戦や戦争、あるいは暴動を仕切っていくのです。

私はインドについて研究したのですが、暴動を起こすのはプロです。ガソリンとか斧とか、いまは携帯電話とかジープとか、そういうものを全部用意しておきます。さらに、自分たちの側がこういうことをされて犠牲が出たという話を広め、演出します。それから、タイミング的にも、恐ろしいことに、テレビが来ると暴動するので、テレビのクルーが来ないと何もしないで、あつ来たぞとなると、うわーっとやるのです。普通、自然発生的に合理的でない人たちが暴動を起こしていると思いがちですが、実はプロの暴力集団であるマフィア集団や過激なファンダメンタリスト集団が企画して、実演して、しかもグローバル化時代にはメディアを使ってそれを発信するのです。発信しないと不成功だと。

インドでは、ヒンドゥー・ファンダメンタリストがセントバレンティン・デーにチョコレート屋さんとかカード屋さんを襲うのです。TVクルーが来ないうちは待つていて、来たら、うわーっとやって、それでテレビには「シヴ・セナがデリーのチョコレートショップを」とかと出るのが、シヴ・セナたちはミドルクラスやアッパー・ミドルクラスは絶対襲撃しないのです。目立つところにいて、自分たちがうわーっとやって、それを例えばCNNとかBBCが伝えれば、インドの右翼は怖いとなります。

変な話ですが、ビンラディンと同じで、テレビでこれが映ったら

全国で一緒にやるぞという合図だったりするのです。だから、テレビで「いま、この地域で寺院が攻撃された」と言うと、他の場所でも準備していますから、行くぞというホイッスルになります。ですから、そういう点も含めて、結構ナイーブではないのです。プロの集団が暴力を使って、どうやって自分たちの利益を実現するかというのを常に考えて、いろいろな武力闘争を起こす、あるいは暴動というような民衆的なものが入るようなものもプランニングされているということです。

そう考えると、どのようにそうした暴力の連鎖を解いていくのかという問題はかなり根深いものであり、プロの暴力集団が動きにくい世界をつくっていくしかないということになります。つまり、プロの暴力集団は、お互いに集団として敵と味方を持っていて、要するにお互いを利用し合って権力を保っているのです。

さきほどこーゲル先生から、ブッシュとオサマ・ビンラディンはそんなに遠い関係ではなくて、結構仲がいいといううわさがあるというお話がありました。確かに石油、あるいはいろいろな情報を通じて、そんなに切り離れた敵と味方ではない。むしろブッシュがこう言ったら、ビンラディンはそら見ると言える。ビンラディンが何か言うとき、ブッシュが対テロ戦争だと言う。共謀しているかどうかまではわかりませんが、お互いそれで得をしているわけです。

冷戦時代でも、ソ連がミサイルをつくるとアメリカが軍備するし、アメリカが軍備するからソ連が軍備するという、お互い敵と味方の暴力集団というのは持ちつ持たれつでした。山口組と住吉連合み

たいに、お互いの敵がいるのでそれぞれ結束する。そう考えてみると、こういう暴力の構図を解いていくには、やはり暴力集団自体が動きにくい社会をつくっていくしかないのではないか、と思います。

暴力の六つの要素というものを簡単に挙げました。さきほど言ったように、日本の軍隊やアメリカの軍隊、あるいは国連軍、警察といったフォーマルな合法的・正当的なものも、マフィア集団、武装勢力、国際テロ組織と呼ばれるようなものも、はつきり言ってしまうとプロの暴力集団なので、要するに六つの要素から成っている。これは当たり前のことで、会社やNGO、政府と一緒にですが、要するに、人間組織として構築されるということです。

客観的な要素から言えば、戦うので「武器」がいる。そのための「資金」、人や武器を調達する資金源、情報を調達するためにもお金が要る。いろいろな形で「情報」が要る。自分たちだけではなくて各種のマフィア集団、国際テロ組織、CIAなどいろいろあるわけですが、そういうものをリンクする「ネットワーク」が必要。そういう点では、NGO、会社、国際機関や政府も、「武器」というところが貿易商品だったりするだけで、同じような機能を持っています。そして、それを動かす「人」と「信念」が要ります。

真ん中に、「信念」とその信念を持ってそれを行う「人」がいる、と考えます。「信念」というのは突き詰めていくと、暴力組織の場合には、人を殺して物を破壊しても実現する大義があると信じているということでしょう。これは、正規の軍隊であっても、違法なマフィア集団であっても、基本的に共通している点です。武器を持って人

を殺しに行くということが、組織の目的となっている。そして、その目的を敢行するには、自分の命も危険にさらす恐れを認識している、そういう人たちの集団です。実は、自分の命を犠牲にしても何かをしようと思うと、その瞬間に、それを邪魔する人は殺してもいいと考えなければならぬことになります。この論理のダイナミクスは、けっこう見落とされがちですが、武装して戦う人々の重要な行動原理となります。ですから、変な話ですが、自分の命を大事にしない人は、人の命も大事にしない可能性があるのです。いいかえれば、自分を犠牲にする覚悟をしている人は、他者にも犠牲を強いる冷酷さを備えられる、ということなのです。そして、非常に極端な思想が核に置かれて、それに共鳴する人々、殊に若者とか、あるいはお金持ちとかいろいろな人たちがかわって暴力集団ができません。

これは正規の軍隊でも同じですね。自衛隊であろうが、たとえば災害救助でも非常に危険が伴います。ましてやイラクまで行くとなると、命を犠牲にする可能性があって行くわけですから、日本の利益になると思わなければ行けないわけです。これは他国の軍隊でも国連軍でも同様なことだと思います。また、そこら辺の失業したおにいちやんがリクルートされるような暴力団的なものであっても、何か事があれば親分のために命をささげるとか、あるいは自分の民族とか宗教のために命をささげると誓っているとか、そういう点では、軍隊に似ています。宗教や民族を掲げた過激なグループはもちろんそうです。ですので、この六つの要素が組み合わさってプロの暴力

集団ができると思っています。

こういう暴力集団の、殊にインフォーマルな部分が活躍するのが、図二で「暴力の空間」と示したところです。「暴力の空間」という概念も一種のタイポロジーです。自分がインド研究者なのでやはりインドのイメージを被せてしまっていますが、それでも世界的にそのように言えると思います。危険で貧しい世界が、マージナルにされ、暴力の起こりやすい地域となっていると、この図で示しています。

そうした「暴力の空間」の一つが紛争地域です。二番目が、暴力的な過疎地、要するに盗賊団が出たりするような、国家から放置されたような地域です。具体的には、ジャングル、砂漠、山とか、貧しい農村地域ですね。それと、そういうものと暴力の要素の点ではリンクしている暴力的な大都会が、第三の「暴力の空間」です。まさに、グローバリゼーションの中にある大商業都市に、こうした空間があります。そこには現在、たいてい大きなスラムが広がっています。冷戦後民主化した国々、その結果、人々の移動が自由になった国々、社会主義から自由化した国々、中国、東ヨーロッパ、ロシアといった地域では、とくにそうした現象が急速に進んでいます。それから、経済難民も多いですが、紛争地域や暴力的な過疎地から大都市のスラムに逃げてくるという人々が多い。あるいは、難民キャンプを経て国内や他国の大都市へ逃げ、そのスラムに住み着くというリンクがつくられていると思っています。そういう「暴力の連鎖」が、現代世界の三つの「暴力の空間」を結んでいるのではないのでしょうか。

対テロ戦争という言葉が頻繁に使われますが、いったいわれわれはこのどんな人々と戦っているのでしょうか。普通の市民は、「安全で豊かな世界」の中に住んでおり、基本的に暴力は社会の外から襲って来ると考えます。実はアメリカ国内にテロリストが数多く潜んでいるのかもしれませんが、アメリカ政府はテロリストが国外から来ると言わなければ選挙戦にも勝てない。さらには、そういう形でしか戦えない。国の中でテロリストに侵食されているとすれば、怖すぎるのです。炭疽菌入りの郵便物の事件は、まさにそうしたセンシティブな点を突いたわけです。けれども、安全保障の専門家は、危険な怪しい世界は外にあることにして話を進めます。「ならず者国家」とか、中東のイラクやイラン、東アジアの北朝鮮が「敵」だというわけです。けれども、テロやその他の現代的暴力の問題は、各国に内在化した問題だという点なのです。テロは、国境とか先進国―途上国といったボーダーでは止まってくれないからです。

そして、戦争、内戦、テロ、暴動といつても、基本的には人間が起すことなので、結局は「人間的な連鎖」です。暴力を使って何かしようとする人は、どのように世界的につながっているのか。対テロ戦争の構図ではつきりしたのは、まさにグローバリゼーションの時代だからこそ、「危険で貧しい世界」と「安全で豊かな世界」は、複雑に結びついているということです。たくさんの方が移民や留学をする。自分の国にいたときには思いもつかなかったような、排外主義的となるという経験をしたり、マージナルで疎外されて貧しいところに追いやられるという経験をします。こうして、ほっておけ

ば自分だけでなく自分の家族や、ことに子供が学校でいじめられるという状況を抱えた移民の人たちが、過激な自己正当化のイデオロギーをつくりやすいという構図が用意されます。

逆に言うと、「安全で豊かな世界」のほうが、内側に貧しい異質な人々を疎外するような構造を持っていて、そこにどんな外国の人たちが入って来る。たとえば、アメリカに來たインドの人々ほどのような経験をするだろう。ヒンドゥーの人たちがインドからアメリカへ行くと、当然マイノリティーになります。自国ではマジョリティーだけれども、英語を話すクリスチャンの国では、マイノリティーにしなければいけません。けれども、子供には自分たちのヒンドゥーの伝統や教えを伝えたい。だから、自分たちのお寺もつくり、自分たちのコミュニティ・センターもつくる。しかし、学校では黒人と呼ばれて差別されたりする。自分の国ではミドルクラスで大学まで出たのに、子供も自分も肌の色だけで差別される。自分の国では召使いも使っていてカーストも高いのに、差別されるだけでなく、安価な賃金で汚れ仕事をさせられる。もちろん、大きな家には住めない。文化の違いだけでなく、こうした挫折の経験ですね。

けれども、その中から成功する人たちも出てきます。そして、ある程度余裕のある人々がお金を出して、大学にヒンドゥー教を研究する寄附講座をつくるとか、お寺を建てるとか、しています。アメリカやカナダなどの大学には、シーク教徒の講座やイスラムの講座も作られました。ですから、「豊かで安全な世界」の中にある、異質

で貧しい新参者を差別する構造が、そこによそから入ってきた人たちに特定の挫折体験を強い、次第に自己正当化をするようなイデオロギーを培養するというダイナミズムがあります。

そういうサイクルにそって、アメリカやイギリスでイスラム、ヒンドゥー、シークなど、アジアの宗教についての本が出版されます。さらに、グローバリゼーションの時代なので、アメリカや欧米から本国に逆輸入されます。たとえば、コロンビア大学出版の本がお墨付きで入ってきます。オーソドックスなものが書かれているはずですが、古いとされながら、実は非常に新しいファンダメンタリズムの叙述が数多く出されます。そして、それらが改めて本家の国に送られ、それを信じる人を増やして根づいていく。周りの地域や国からも、そうした新しい思想を学びに聖地にくる人も増える。イスラムだったなら、たとえば東南アジアや南アジアから中東という遠いところに人々が行く。こうして、新しいファンダメンタリズムの教えが広まっていきます。移民している人が、子供を本国の聖地に送り戻したりします。ユダヤ教の国であるイスラエルも、欧米との間でそういう関係をずっと維持しています。つまり、すでに移民した人が母国に、つまり、インド人でもう二代目なのだけでもアメリカからインドに自分の子供を留学させます。

オサマ・ビンラディンだけでなく、アルカイダで非常に注目されたのは、欧米に留学した非常に優秀な、しかも豊かな青年たちが中核になっていた点でした。この現象は、アルカイダに限られません。グローバリゼーションの時代に、なぜ排外主義的なファンダメンタ

リズムの思想が現れるのか。しかも、非常に速い速度で普及するのか。この問題を解くのが、先進欧米諸国と途上国の最近の関係です。ですから、アメリカを好きなインド人がたくさんいると同時に、アメリカに差別されるインド人がたくさんいる。そういう「ディ・アスポラ」の思想とダイナミクスが、対テロ戦争の時代に、異種の二つの世界を結ぶ一つの鍵になっていると思っています。

四 紛争の地図——なぜイスラムか？ なぜアメリカが対決するのか？

「紛争の地図」と書いたのですが、いいかえれば、なぜいま対テロ戦争でイスラムが「敵」になっているのか、なぜアメリカが対決するのかという問題です。私が得意なところで、アフガニスタン・パキスタン・カシミール・インドのつながりを説明しましょう。

最初の、破壊の光景、というところでお話しましたように、今、ニュースばかりがメディアでパンパン入ってきます。イスラムは怖い、ハンチントンが言ったとおりだったかという感じで、「文明の衝突」だとか、「イスラム圏は危険だ」と思ったりする可能性があります。しかし、中東、中でもパレスチナ・イスラエル問題、イラク問題、イラン問題、アフガニスタン問題、あるいは南アジアのカシミール問題は、それぞれ別々の問題でもあります。さらに、インドネシアの問題だって、全然違います。これまでは、密な関係性はそこまではなかった。フィリピンのイスラムも同様です。けれども、そ

うした関係が、九〇年代以降、急速に変わってきています。

アメリカの中東介入、そういう流れの中でアメリカの近代化路線に反発して起こったイラン革命、それに押さえようとするアメリカの大義の下の軍事・外交政策、そこからイラン封じ込めのためにイラクのフセイン政権を使って、アメリカがイラクに支援を行った時代、さらに一九八八年以降のイラン・イラク戦争の終了とイランの穏健化によって、対イラク支援が終わった後。そして、一九九〇年に、今度はアメリカが盟友としていたイラクがクエートを侵攻した。イラクがアメリカの「味方」だったのに、今度はいきなり「敵」になってしまった。そこで湾岸戦争。逆に言うと、こうしたできごとのつながりを見ただけでも、イスラムは一つではなかった。

歴史的には、クリスチャン陣営の中でのカトリックとプロテスタントとは戦いはすまじかったし、アングリカン・チャーチとかいろいろありますが、実は一つではありませんね。だから、イスラムだって多様な社会に根付いて、広い範囲で信仰されています。中東の真ん中の人は、アフガニスタンなんてあんな田舎のものは本当のイスラムではないとか、パキスタンでもカシミールなんてあんなのは全然違う、本当のイスラムでないからきちんと改宗させなければいけないとかと言ったりしてきました。また、東南アジアのインドネシアなんか、アラブとは全然違うイスラムだとか言われたりしています。つまり、お互いにあそこは田舎だとか、こっちは正統だとか、シアアだとかスンニだとか、その中でも何派だとか、あんなのは信じてはいけないとか、もう一度再改宗させなければいけない

とか、いろいろなことを思っているのです。だから、イスラム世界とは言っても全く一つではなかったし、いまでもそうとはいえませんが。

しかし、なぜそれが一つになってきてしまったように見えて、しかも全部がアメリカの「敵」のような感じになっているのか。それも、アメリカが認識するだけではなくて、イスラムの中から反米という合唱の声が出てきているのか。とくに、アメリカが歴史的な干渉を行ったり、逆に軍事支援や介入を行ったところで、そうした現象が見られます。イランやパキスタン、イラクはそうです。以前は親米だった時代がありますが、最初は親米でも、後に痛い目に遭ったために、みんな反米になっていく。

なぜ痛い目に遭うかと言うと、これは簡単なことですが、アメリカが必要なきときには、おまえがいらないとアメリカは困るからお金や軍事力をあげるわけです。イラン、イラク、パキスタンにもそうしました。けれども、そこでの紛争が終わったり、アメリカの関心がなくなったり、大統領がかわったり、あるいはソ連が解体したり、ともかくアメリカの状況が変わってもう協力は要りませんとなると、いままで軍事援助していたのに、はい、さようなら。それだけではなくて、いままで軍事援助しているから、相手は結構地域軍事大国になっていて、脅威になっていたりして、「おまえは核を持っているのではないか」と。パキスタンもイラクもそうです。イラクは核を持っているのではないか。だから、今度は統制しようとし、言うことをきかないと罰を加える。もつと軍縮しろと言うわけです。

アメリカ議会は、すぐころつと立場を変えやすい。核不拡散のためにパキスタンにはもう軍事援助はできないとか、すぐ聞かえがいいことを言うのですが、つい二年前までは軍事支援していたのに、いきなり、さようなら、みたいになる。アメリカがイランを封じ込めるときにはフセイン体制を支援してきた。あるいは、アメリカがアフガン内戦に介入して、冷戦時代の八〇年代ですから直接に米軍が派兵できないし、派兵すればソ連との直接対決になってしまう。

だから、パキスタンの軍事政権だろうが何だろうが、自由陣営アメリカの「味方」にして軍事援助をした。しかし、ソ連が八八年に撤退したら、もう米ソ戦の舞台としてアフガニスタンは要らないので、内戦でもいいじゃないですかということになって手を引く。パキスタンの軍事政権は使用価値がなくなりました。パキスタンの大統領はいままでアメリカを力の背景にしていますが、アメリカが手を引くことに決めた八八年に、アメリカにとって運よくというか、偶然に飛行機事故で死に、この国は民主化の方向へ進むことになりました。そして民主化すると、今度は、パキスタンには核疑惑があると言って、アメリカは援助をカットして制裁すると言う。ソ連はもういないし、この地域にアメリカの「敵」はいない。だから、アフガニスタンは内戦で結構。暴力的な世界だろうと何だろうが、アメリカの利益には関係ないのでもうお金も出しません。その結果、パキスタンの中には、いまでもものすごく親米だった人も含めて、反米の世論が育まれます。

それだけではなくて、アフガニスタンの内戦に干渉するためにア

メリカはイスラム武装勢力とパキスタン軍のリンクを育てて使いました。ですから、パキスタンの軍や社会にはイスラム・ファンダメンタリズムが浸透していきます。アメリカは手を引いたが、社会の基層部も含めてイスラム・ファンダメンタリズムが広がり、それに影響された軍の組織は残ります。そうすると、アメリカがかつて利用し、反米に転じたイスラム武装勢力が内戦下に残る、あるいはパキスタン軍とパキスタン社会にイスラム・ファンダメンタリズムの組織が残る。こういう構造が九〇年代のパキスタン、そして内戦状況のアフガニスタンに展開していきます。

ですから、いままでアメリカが国益のために使っていた「暴力の構図」が、その後、反米に向かうような「暴力の構図」に変わったのです。パキスタンの中にタリバーンの基礎が築かれ、アフガニスタンとパキスタンが手をつないでイスラム勢力を結びつけ、インドとかパキスタンが対立して分割して、しかも緊張が半世紀以上続いているカシミールにも、軍備を拡大したパキスタン軍が援助をしてアフガニスタンから武装勢力が入っていく。それまではカシミールの武装勢力はそこまで近代的な武装をしていなかったようですが、九〇年代にはアフガニスタン内戦で活躍した武装勢力がある意味で失業状態にあったために、どこでも行きますよという状態になります。そして、パキスタンを経由してカシミールに入り、武装勢力としてインド軍と衝突する事件を起こしました。さらに、カシミールの若者がリクルートされ、パキスタンを通じてアフガニスタンに行き、軍事訓練を受けてもう一度戻ってくる。そういうリンクが九〇

年代に強くなります。

こういう流れの上に、タリバーンがアフガニスタンの政権を握り、そして、オサマ・ビンラディンがアルカイダの基地をつくるという展開となり、九〇年代後半を迎えます。ですから、皆様が御存じのように、ビンラディン自身も最初は内戦を戦うためにアフガニスタンに行つて、実証はなかなか難しいのですが、言われているところによるとCIAが訓練して、イスラム武装勢力としてソ連軍に対決するために活動したサウジアラビア人であるということになります。ですから、ここにもまた、米ソがアフガニスタンで対決したときにアメリカが使った人が、アメリカの影響力が退いた後、捨てられて反米になったという構図があります。そのすぐ後、湾岸戦争でイラクを攻撃するためにサウジアラビアを基地とした米軍が立ち去らない。アメリカがなぜ湾岸戦争を起こしたのか。こうした経緯の中で、ビンラディンは、アメリカに利用されて捨てられたことを恨みに思つて、反米の闘いを始めたと言われます。

こういう「紛争の構図」を見てよく考えてみると、大統領選挙のたびに、あるいは何かが起こるたびに、アメリカが自国の利益としてつくり出した「敵」と「味方」の構造が、アメリカ自身の都合でひっくり返されていく。そのとき、いままで「味方」だった武装勢力や軍事政権が反米勢力になっていく。これをつなげていくと、おそらく現在のイスラム世界がアメリカの「敵」となる、という構図になります。

五 暴力の文化と処方箋

そういう流れの中で、インドでも、イスラム・ファンダメンタリズムに対決するために、ヒンドゥー右翼が九〇年代に高まります。イスラムは国内ではマイノリティーですが、周囲の国々はイスラムがマジョリティーの国が多い。背景には、イスラムの組織には、中東からのお金が送られてきて、ヒンドゥーの側に焦りが生まれたという事情もあります。ただそれだけではなく、先ほど言ったように、グローバリゼーションの時代には、インドという価値が下がってしまった。客観的だけでなく、主観的にも下がってしまった。これは、感覚的には、ロシアとか中国についてもそういう説明がつくと思います。それまでは大国だった、社会主義インドだった。すべて *Made in India* だと。本当にすごくプライドがある人たちだった。われわれが文明をつくったのだ、数字のゼロとか、日本語だってインドから来ただろうというぐらい自信があったわけです。車も列車も全部 *Made in India*。コンピュータだって *Made in India*。八〇年代はまだそういう感じの時代だった。しかし、社会主義を放棄して自由化すると、九〇年代に何が起ったか。これはソ連も中国も同じです。九〇年代は、*Made in India* というのは出来損ない。はつきり言う、パナソニックとかメルセデスベンツ、ホンダ、フォードとかがいいわけです。いまは政府の車とタクシーだけがまだ *Made in India* です。ですから、目の前でグローバリゼーションがうわーっと進み、インド人としての自信が打ち破られた。そして、貧しいから

いいものが買えない。ですから、インド人は急に自信がなくなってしまうて、本当にマイルドになってしまいました。昔はすごくいばっていたのですが、最近あまりいばっていません。

人間は、すごく自信があるときは、帝国主義的な考え方もするかもしれませんが、非常に寛容な考え方もできる。豊かな気持ちだと、国内のマイノリティーとか小国に対してケアをしたり、あるいはお互いさまたいことが言えたりします。しかし、アメリカがトップ、先進国がトップ、インドはボトムという発想になる。しかも多くの人たちがグローバリゼーションで外に移民で行きます。そうすると、要するに、インド人としてのアイデンティティーをどこで担保するかというと、もう *Made in India* の公共物資とかテレビではだめなわけです。生活程度も貧乏だとわかってしまいます。テレビにCNN、BBC、ディズニーとかが映り、自分たちの国がいかに貧しいかがわかるからです。

そうすると、自信を持つためにすぐできてお金がかからないものというのは、独自のアイデンティティーです。これが、一番お金がかからない。しかも、民主主義の中では政治家は選挙に勝たなければいけない。こっちはIBMとかホンダとかに負けていて、どうぞぞ、よく言えば切り下げ、安くて結構ですと言っておいて、こっちは「インドは永遠なり」と言う、選挙で勝ちます。

もっと言ってしまう、これも変ですが、民主化と暴動や内戦がセットで起こってきます。政治家は選挙で勝たなければいけない。そのときに理想像が周りにありません。財源がないので、社会福祉

をしますとか、皆さんのよりよい生活を五年後に保障しますとかで
きないわけです。できないとすると、セルビア人のわれわれの故郷
を奪還しようとか、そういうのはすごく簡単なわけです。簡単とい
うか、安上がりだし、しかも結束できる。そういうものとセットだ
とわかるのは、恐ろしいことにだいたい選挙の前に暴動が起こると
いう現象のためです。

緊張の中で選挙は非常に危険なゲームとなります。どうしてかと
言うと、選挙前にマフィア集団や右翼組織が暴動を起こして、マイ
ノリティーをターゲットに攻撃する。例えば、イスラム教徒をヒン
ドゥー教徒が殺すという事件を演出して暴動を起こす。そうすると、
マイノリティーは怖いので、みんな避難してしまい、例えば一〇―二
〇万人規模とかで難民キャンプに行ってしまう。そうすると、
これまでの選挙区の投票権が行使できず、新しいところでは投票で
きない可能性があります。そして、従来の選挙区からはイスラムが
みないなくなってしまう。だからヒンドゥーだけになって、ヒン
ドゥー政党が勝つ。あるいは、いまのブッシュの対テロ・キャンペー
ンもそうですが、そのキャンペーンだけで、怖いからやはりマジョ
リティーの政権党に入れておこうと。そういうことが九〇年代のイ
ンドでも進行しました。

ですので、例えばインドでは九〇年代に、民主化と自由化、それ
からグローバリゼーション、右翼、ファンダメンタリズム、暴力と
いうのがセットで起こりました。インドだけではなく、いろいろな
地域で見られた現象だと思っています。冷戦後と言われる二〇年間

ぐらい、そういう暴力が非常に根つきやすい政治経済構造が世界的
に広がったのではないかと考えています。

それをどう絶ち切るか。実は、いまそれが問題です。要するに、
国際テロ組織をどうカットするかといったときに、例えば各地のマ
フィア集団とか、そういうものをつながった銀行取引とか、テロリ
ストが逃げていくのはどこか、そういう問題を含めて、いかに世界
各地がリンクしているのかわかると思います。つまり、ビンラディ
ンはアフガニスタンからいったどこへ行ったのか。アメリカに捕
まっていたのではないかという説がありましたが、やはり捕まってい
なかった、あるいはブッシュが逃がしたのかもしれませんが。わか
りませんが、逃げていけるとすると、アフガニスタンからパキスタン
に行くのか、カシミールに行くというルートもあり得るし、あるい
は旧ソ連圏に逃げるというのもあるかもしれない。イスラムと言
うと、フィリピン、マレーシア、インドネシアとかこちらの近くまで
来ます。

ですから、逆に言うと、対テロ戦争というのは、バグダッドに爆
弾を落として簡単に終わるといえるものではない。ある国を占領した
ところで終わることもないということがわかんと思っています。ある
国を「ならず者国家」として、戦争をして敗北させて、占領し無理
失理民主化させて、それで安全になりましたというわけではないと
いうことです。そういうことをしても、みんな逃げますし、死んだ
人にはかわって新しい世代の若者が出てきます。もちろん、武装訓
練します。いまスーダンが緊迫した問題になっていますが、危険で

貧しい世界だとラベルを張られたある国が、仮に国際社会の対テロ戦争で占領されて、民主化して和平化したとしたら、そこから暴力が根づいた空間のところにまた逃げて、そこでまた基地をつくる。またそこに何かあると、また逃げて……ということなのです。

ですから、それを解決するのは、軍事力によってどこか外国を爆破して終わる、あるいは占領して民主化して和平化して終わるということでは、おそらくないだろう。そのスキームで始めたアフガニスタンも非常に危ないですが、イラクは最初の企画が全く成功しない恐れがあります。戦争が終わらない、泥沼になっているということです。ですから、日本の自衛隊は抗戦しない軍事力として、カメみたいにサマワに閉じこもっているわけですが、泥舟に乗っているということになります。

六 暴力の連鎖を解くのは誰か

暴力の連鎖を解くのは誰かというのですが、基本的にはあきらめないで、焦らないで、頭にあまり来ないで、要するにじっくり社会を変革していくしかないと思います。じっくりと危険で貧しい世界を少なくしていくしかない。貧しさというのはGNPではありまないので、収入が低くても安全な楽しい村というのはあり得る。これはアマルティア・センが書いていますが、それはいま非常になくなりつつある。収入が低いとそのまま危険になってしまふ、荒れてしまふ、若者はどんどん出て行ってしまうということになります。

ですから、逆に言うと、いまある世界の中の暴力地域になりやすいような貧しい社会を、そうならないように市民社会の方向に組み込んでいくということだと思っています。

それなら、どうすればよいのか。私たちは「安全で豊かな世界」に、しかもかなりトップの位置にある国にいますので、どうしても「危険で貧しい世界」の人々の苦しみとか具体的な状況というものには理解が及びにくい。逆に言うと、爆弾を落として何とか解決したい、あるいは自国の安全保障の壁を上げて悪い奴が入らないようにしたい、入ってきたらすぐ取り締まって、難民で変なのが入ってきたら追い出す、ということを考えやすい立場にあるわけです。つまり、ミドルクラスが貧しい人たちをスラムに追いやって見ないことにする、自分たちの地域のごみを貧しいスラムの方に追いやって終わりにする、あるいは東京で捨てられないごみをフィリピンで捨てる、東京に置きたくない工場をフィリピンや中国に持っていく。

要するに汚くて危険なものや貧しくて見たくないものは、どこか違うところに入れて見えないことにして、そこから壁にして入れないにする。そういう認識方法をとる限り、この二つの世界の分断は深まりこそすれ、なくなりはいししない。なくならないとすれば、その間の暴力の構造は変わらないと思います。やはり両方の世界を緩やかに結びながら、少しずつですが、危険で貧しい世界を減らしていくことが重要なのではないかと思っています。

ですから、いまもつとも必要なところは「いじめないという論理の確立」です。日本でいう「いじめの構造」と似ているので、「いじ

め」という言葉を使っていますが、要するに、強いマジョリティーの先進国の側が、弱いマイノリティーの途上国の側、あるいは紛争地域に、暴力をふるわないという約束をするということです。これが大事だと思っています。

さきほど言いましたように、民主主義国家は必ずしも平和的な国家ではない。戦後、日本は民主主義と平和はセットなのだと何となく思っていた。民主主義憲法と憲法九条はセットだろうと思っていたのですが、よく考えてみると、アメリカは民主主義で戦争ばかりしています。ですから、民主主義と戦争というのは別に相性が悪いわけではない。先ほど言いましたように、民主主義の中からものすごい右翼が出てくる。マジョリティーを背景にした好戦的な右翼というのは、民主主義の中から出てきます。排斥的な勢力というのは、マジョリティーを獲得すればとても人気がある。オーストラリアはハワード政権がずっと続いています。やはり人気があるのです。ですから、民主化したから終わりではなくて、自由化して民主主義となった地域も含めて、そしていままでの民主主義国家も含めて、もう一度改めて暴力を使わない、あるいは戦争をしないという原則を、民主主義社会の中にどう組み込んでいくか。そうした課題を、はつきり考えなければいけない時になっています。

私は、憲法九条を守れという昔からの論争に入ると、どこことなく怖い人がいっぱい出てくるので嫌なのですが、日本がもう一度、民主主義であるけれども絶対に戦争をしませんと、国家的な約束することには、大変意味があると思っています。憲法九条は今まで古

い古いと言われていましたが、アメリカは日本にしたことと同じことをイラクやアフガニスタンにしているのです。民主化して和平化して、日本はある意味ではアフガニスタンとかイラクのようだったわけです。だから、いまの段階で、日本が絶対に戦争をしない、軍隊を戦争地域に送らない、戦争の加担をしないということをしっかりと採択し直すことは、非常に意味のあることだと思います。それは民主主義を、自分たちの手で非暴力化することにつながる一歩だと思っています。憲法九条の再確認には、歴史的な意義があります。

もう一つは、いじめられない自分をつくる人たちをどうサポートするかということです。紛争地域や荒れた辺境地域、スラム社会と言っても、どこもかしこも荒れているわけではない。中には、スラムの人たち自身が、NGOや国際機関、政府機関とかいろいろな人たちの助力を得ながら、例えば、識字教育をベースにしたり、医療サービスを自分たちで実施するベースを作ったり、スラムのコミュニティ活性化を行うなど、いろいろな形でいじめられない自分たちを形成しようとしています。つまり、市民社会のエンパワーメントとコミュニティ構築の努力です。

例えば、ボンベイで暴動が起こった。そういうときは、とてもとどめられないことが多い。けれども、よく見てみると、暴動が起こった後も安全に残ったスラムと、暴動の波に巻き込まれてしまったスラムがある。どういうところが違うのだろうと理由を探していくと、例えば、あるスラムで日ごろからイスラムとヒンドゥーの子供たち

を一緒に育て、一緒に遊ばせるといった、宗教の違いを越えたコミュニティ活動を行っていた。だから、いざ何か起こったときにヒンドゥーとイスラムで殺し合わなくても済むように、むしろ居住地域のコミュニティが協力できた。こうして、いろいろなネットワークを日ごろから教育や保険など地域の活動で形成し維持することが大事だということがわかってきました。そうすると、暴動が起こったら、だいたいよそ者のプロがやってきて騒動を煽るので、そうした人々が自分たちの地区には入ってこないように、自分たちでお金を出し合って鍵のある門をつくりましようとか、そんなことが行われています。そういう市民社会のエンパワーメントやコミュニティの復活を、NGOやさまざまな政府機関、あるいは国際的なものだけではなくて国内のプロがいろいろな形でアイデアを出して支えています。殊に専門家として、法律家はすごい力になりますし、ジャーナリストや医者、教師もそうです。

逆に、いま言ったようなコミュニティの仕事をやらないとどうなるか。暴力団やマフィア集団なども含めて、善良な組織だけでなく、おかしい宗教グループなどが活躍の余地を見出します。国家が社会福祉とか安全を提供してくれない、誰も何もしてくれない、自分たちの居住区の中にも積極的なイニシアティブをとる人がいないということになると、そういう暴力団的なものとか、宗教的なフアンダメンタリスト・グループなど、地域の基盤をつくりたい組織が根付きます。そして、若者たちに仕事を分け与えます。地震とか洪水などの災害が起こると、それを機にして復興運動をし、右翼や宗

教集団のおにちゃんたちが雇われて鉢巻きして活躍します。でも、逆に言うと、自分たちの地元のNGOとかコミュニティ・グループが強いところでは、そういう組織は入る余地を見出しにくくなります。ですから、そういう市民のエンパワーメントとコミュニティの復活という部分を、軍勢力ではなくて、経済力とか市民のパワーで豊かな国の人々が支援することは重要です。それは、現実に既にたくさん行われていますし、もっと発展させることができると思います。

インドも、それこそグローバルゼーションによって、民主主義がこれまでとは違った形で非常にダイナミックに変化しました。そういう中で右翼が台頭したり、戦争したり、核保有したり、暴動が起こったり、いろいろな暴力を経験しました。けれども、民主主義の展開過程で、このごろようやく、援助というものは、アメリカやヨーロッパ、日本から来る外国のものが第一ではなく、まず同じ国の市民が自国のほかの人たちを支援するものであるはずだ、という考え方が力を持ちつつあります。変な話ですが、デリー、ボンベイ（現ムンバイ）、カルカッタなどの知識人や専門家、あるいは一般の市民が、運動や組織を基礎に、インドの他の地域の人々を支援するということは、そこまで活発ではありませんでした。インドの中で、自分たちのお金を寄付して送って同じ国民の仲間を助けるという発想は、ポストコロナアルな社会の性格を反映して、弱いものでした。けれども、この間のグジャラートの地震とか暴動、あるいはカシミール紛争など、二〇〇〇年代に起こった災害については、国内で市民

がいろいろな形で助け合う活動が、非常に活発に観察されました。つまり、自分たちの国を市民社会が自律的に支えるようになってきたのだと思います。

印パ関係についても、アメリカに頼って解決しようとするのではなくて、自分たちの市民交流でボーダーというか国境の壁を下げましょうと。例えば、両国にとつての独立記念日は、逆に戦争の始まりといった歴史的意味合いがありますが、その独立記念日に国境に両方から市民が行って、夜中にろうそくを立てて歌を歌おうとか、そうした行事がいくつも執り行われています。また、従来はなかなかそれぞれの隣国に入れなかったのですが、何百人も同時にビザを応募すれば、官僚機構がパンクするからみんな入れてくれる。だから、みんなでビザを応募しよう」と言う運動が一九九〇年代終わりに始まり、インドから大量に観光客が行くようになったり、パキスタンから来るようになりました。その結果、市民のさまざまな活動によって、国境線の緊張とか国境の高さを下げようという動きが展開し、今では経済的な交流も進んで、両国の相手国イメージは大きく変わり、インドではほとんどパキスタン・ブームのような現象も見られます。

日本で国際協力というと、何となく日本のような豊かな国から貧しい途上国への援助という固定的な発想をしてしまいます。けれども、例えばインドのような民主主義で経済的にも自由化した国においては、その国の市民活動やNGO活動があります。いいかえれば、同じ国の中の「安全で豊かな世界」の人々が、「危険で貧しい世界」

の人々と手をつないで問題を解決していこうという、活発な動きがあります。ですから、国際協力も、そういう相手国の市民的な活動とリンクしつつ、サポートできるところでサポートしていこうというものに変わっていくと思います。昔の構造とは少し違う形の、いわば相互連携の、市民的ネットワークキングの時代ですね。

最後にもう一度、「暴力の連鎖を解くのは誰か」という問題に戻りましょう。問題を解く鍵を持っているのは、プロの暴力集団に属していない人たち、武器を持たず暴力を使わない、つまり人を殺したり傷つけないことを信念としている人たちではないでしょうか。そういう非暴力の人々が社会の主役となり、さまざまな困難に平和的な手段によって立ち向かっていく。そうした日々の地道な活動の中に、暴力の連鎖を解く知恵と力を、私たち自身が発見していくことができると思っています。

対テロ戦争とアジアの市民社会

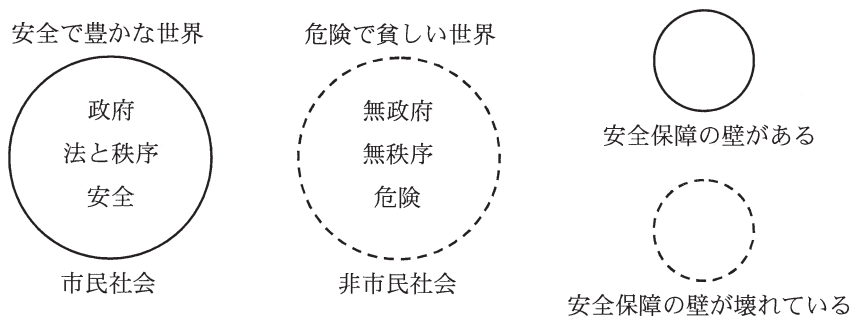
——暴力の連鎖を解くのは誰か——

明治学院大学国際学部・竹中千春
takenaka@k.meijigakuin.ac.jp

1. 破壊の光景

2. 安全で豊かな世界、危険で貧しい世界

図 1

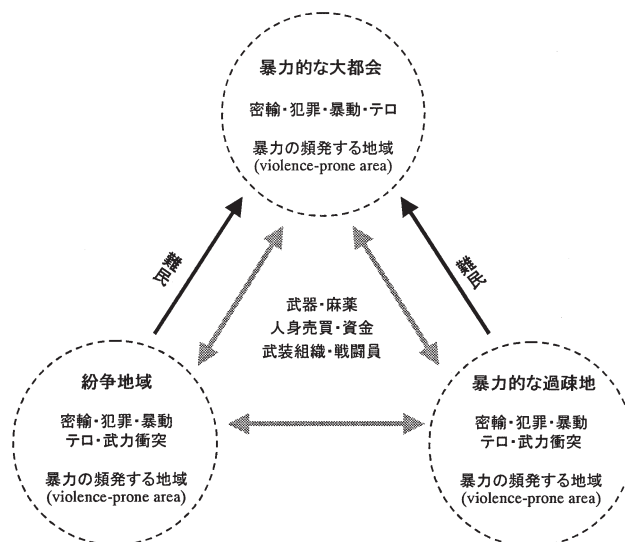


3. 暴力の構図

現代世界の政治的な暴力は、プロの暴力集団が企画・実演するものである。

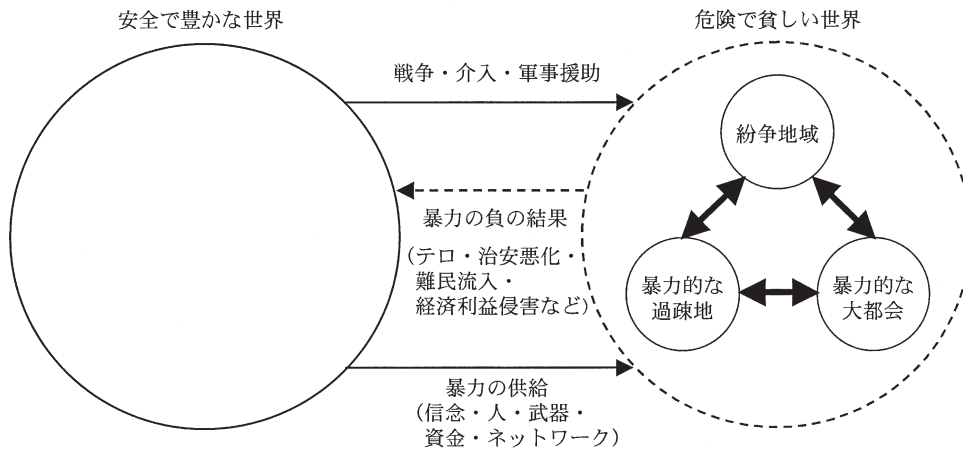
- (1) 暴力の6つの要素 信念・人・武器・資金・情報・ネットワーク
- (2) 暴力の空間

図 2



(3) 暴力の連鎖

図 3



人間的な連鎖——貧しい世界から豊かな世界への移民（ディアスポラ）とその思想

4. 紛争の地図——なぜイスラムか？ なぜアメリカが対決するか？

例：アフガニスタン・パキスタン・カシミール・インドのつながり

- (1) アフガニスタン内戦
- (2) アメリカのイスラム武装勢力支援、対パキスタン軍事援助
- (3) パキスタンのイスラム化政策
- (4) カシミールへのイスラム武装勢力の侵入
- (5) 反イスラムを掲げるインド・ヒンドゥー右翼の台頭
- (6) アルカイダ問題の浮上
- (7) 核保有とカシミール紛争へのアメリカの関与

5. 暴力の文化と処方箋

暴力の根づいた社会には、暴力の文化が蔓延り、暴力の政治経済構造がそれを支える。

例：グローバル化時代のヒンドゥー右翼、ムンバイのシヴ・セナ

暴力の文化をどう断ち切るか。非暴力の文化に変えていくのか。

- (1) 暴力を使う方法
- (2) 暴力を抑制する方法
- (3) 非暴力の方法

ガンディーの非暴力運動

—— 6つの要素（信念・人・非暴力の武器・資金・情報・ネットワーク）

6. 暴力の連鎖を解くのは誰か

暴力とは、究極のところ、強者の弱者に対するいじめである。

- (1) いじめの認識——暴力をふるう側から、暴力をふるわれる側へ
- (2) いじめないという倫理の確立——政治の非暴力化、民主主義の非暴力化
- (3) いじめられない自分をつくる

——市民のエンパワーメントとコミュニティの復活

誰が、いじめに気づくのか。誰が、いじめられた人に共感するか。

誰が、爆弾を落とす側からではなく、爆弾を落とされる側から、戦争を考えるか。

安全で豊かな世界と、危険で貧しい世界とを、どう結ぶのか。

例：カシミール紛争やグジャラード暴動とインドの市民社会

* 以上は、拙著『世界はなぜ仲良くできないの？ 暴力の連鎖を解くために』（阪急コミュニケーションズ、2004年6月）の一部です。

Reference

- Kaldo, Mary, *New and Old Wars: Organized Violence in a Global Era* (Stanford, California: Stanford University Press, 1999) [M・カルドー『新戦争論』、岩波書店]
- Ignatieff, Michael, *The Warriors' Honour: Ethic War and the Modern Conscience* (London: Vintage, 1999) [M・イグナティエフ『仁義なき戦場』、毎日新聞社]
- Gandhi, Mahatma, 'Hindu Swaraj (1910)' in Rudrangshu Mukherjee ed., *The Penguin Gandhi Reader* (New Delhi: Penguin, India, 1993) [M・ガンディー『真の独立への道』、岩波書店]

暴力の連鎖を断ち切れ

数千人もの命を奪った突然の暴力は、不条理以外の何ものでもない。暴力は、人に言葉を失わせる。

現代のテロは、日常社会のしくみを利用した、無差別の殺戮だ。アメリカと攻撃したテロリストの間には、圧倒的な力の非対称性がある。だが、ネズミが象を倒すように、ペンタゴンは混乱し、ウォール街は活動を停止した。

力の非対称性は、超大国と紛争地域の関係と重なる。中東にアメリカが介入を続けた歴史は、テロの系譜と裏腹だ。不幸にも、戦場では珍しくない破壊と虐殺が、繁栄する巨大都市を舞台に、衝撃的な規模で再現された。

アフガニスタンのイスラム原理主義勢力に責任を帰す方向に、事態は進展してきた。ブッシュ大統領は、これは戦争だ、自由を脅かす「悪」には必ず勝利すると宣言し、先進各国も協力を約束した。安全保障の強化にとどまらず、国民を守るための「自衛戦争」を求める声は強い。結局、テロを抑制するには、大国の軍事力による制裁しかないのだろうか。

どのような「正義」を掲げようが、人を害する暴力は、適切な手段として使われたときしか、正当化できない。薬物中毒のように、政治過程が暴力手段に過度に依存するようになると、その有効性は減少し、破壊性が増大する。冷戦後の国際社会は、民族紛争に加え、テロと大国の制裁という、暴力に依存する深刻な構造を抱えている。

暴力が一度使われると、憎しみを媒介に、次の暴力を招くというダイナミズムもある。世界を同時につなぐメディアが、それを加速する。事件後、イスラム過激派の歓喜する姿が伝えられ、逆に、タリバーンの後ろ盾とされるパキスタンと対立するインドでは、ヒンドゥー右翼がイスラム攻撃のデモを行った。

しかし、民族とか宗教という「正義」の色眼鏡をはずせば、超大国でも紛争地域でも、武力を利用するのは少数の権力者だとわかる。暴力への信仰に支えられた彼らの争いが、人々の命を奪ってきたのである。

グローバル化時代には、テロの被害も国境を越えた。安全な暮らしを実現するには、人々の共生を許す、寛容で非暴力的な社会を広げていくしかない。遠回りに見えても、そうした動きを支援する環境作りが、平和への近道ではないか。

少年が、自爆する戦士にならなくてよい。子どもらしく育つことができる。恨みと復讐という暴力の連鎖を解く鍵は、それを可能にする市民社会の構築にある。戦争と内戦に荒廃した土地で、こうした努力が日々模索されている。ニューヨークの人々の祈りを、米軍の空爆ではなく、紛争地域の人々の祈りと結びつけることはできるだろうか。

(『朝日新聞』2001年9月15日)